

女性が輝く社会を目指して起業。
日々、邁進する自分を支えたのは
中学のときに渡された1冊のノート。

株式会社Dorest 代表取締役社長
(社)日本CIS認定協会 理事
人事コンサルタント 黒田 佳奈子さん
東明館高等学校9期生
中央大学法学部卒

「なつかしかね訪問」 訪問したのは、灰塚晶子教諭（英語）です。

女性が活躍できるフィールドを広げるために。

5年前に「女性の活躍促進」を理念に掲げた社団法人を立ち上げ、主に全国の金融機関で働くビジネスウーマンを対象とした管理職育成を行っています。5年間でのべ4,000人を超える女性と接し、1,000回を超える研修やセミナーを提供してまいりました。

今の事業は、当初は社内ベンチャーとして立ち上げ、2年半前にMBOをして独立をいたしました。日本は女性の管理職が少なく、特に金融機関では能力のある女性が埋もれているという課題を耳にしたのが29歳の時ですね。30歳で起業すると決めていた私は、この課題の解決に自分の使命を感じ、この分野で起業することを決めました。

1つの企業に対し、3~5年という長い期間でコンサルティングに入ります。今の事業はスタートから実質4年ほどですが、将来の役員・管理職候補となる若手女性を、50名育てることができています。事業自体は「まだまだこれから」という気持ちですが、自分自身については、学生時代に思い描いていた理想の自分に近づきつつあると実感します。

元来、落ち込みやすい性格だった私は、人前で堂々と話し、批判にもめげずに自分の意見をはっきりと言える人に憧れていたところがあります。小学生のころには、将来は政治家になりたいと思っていました。そして、政治家になったら学校教育をもっと良くしていこう！と思っていましたね。

心のバランスを崩していく同級生を見て抱いた疑問。

さかのぼれば小学6年生のころでしょうか。私は進学塾に通っていたことで、色々な出会いがあり

ました。基本的には皆、一生懸命勉強をしてやる気に満ち溢れていたのですが、その中に、塾の試験でカンニングをしたり、先生をいじめているような同級生がいました。その子は、低学年のときはとてもそんなことをするような子ではなく、仲良く楽しくしていたのに、5年生の時のご両親の別居を境に、少し様子が変わってしまったのです。他にも、〇〇中学に絶対入らないといけない！と、英才教育のプレッシャーで潰れそうになっている同級生もいました。

もともと優しいはずの同級生たちが家庭環境に悩み、勉強に追われ、心のバランスを崩していく様子は、とても悲しいものでした。私は「大人になったら、政治家になって教育制度を変えたい！学校に行けば、どんな時でもみんなが幸せになれるような学校を作ろう」。生意気にも、小学6年生のときにそう決意しました。

東明館へ進学を決めたのはその目標があったからです。両親は、家の近くの別の私立校を勧めましたが、私は東明館が良いと言いました。意思を尊重してくれたことを今でも感謝しています。九州でもトップクラスの学力で、クラスメイトはみんなが仲よく、先生も熱心に教えてくれる。まわりには自然があつて校庭も広く、勉強の合間の気分転換にも最高。そんな恵まれた環境で過ごす日々は、今思い出してもきらきらと輝いています。

私が楽しそうに通っていると、2つ年下の妹も「東明館に通いたい」と言って頑張って勉強をし、入学しました。兄弟姉妹で通っているという同級生も、結構多かったですね。

先生たちは先進的な取り組みに積極的で、当時はディベートを取り入れた授業が印象的でした。環境問題や死刑制度など普段は考えもしないことがテーマになります。それでも、自分の意見を発表しなくては行けませんから校内の図書館で調べて自分なりの考えをまとめます。教えられるだけの勉強ではなく、自分の頭で考え、それを人前で話すというトレーニングになりました。

落ちこぼれだった自分を引っ張り上げてくれた。

高校では生徒会に入り学年のリーダーを務めました。そんな私ですが、じつは入学当初はリーダーなどとは程遠く、テストで156人中152番目と落ちこぼれ状態からのスタートでした。赤点ぎりぎりを取って先生に呼びだされることもありました。悔しくて、恥ずかしくて、よく泣いていましたね。

「どうせバカだと思われているんだ」と落ち込んでいたのですが、授業で分からなかったことを聞きにいくと、先生は「説明が分かりにくくてごめんな」と丁寧に教えてくれて。それ以来、疑問があればすぐに職員室へ行き、分かるまでしつこく聞くようになりました。

それでも、152番から這い上がるにはかなりの努力が必要でした。支えになったのは、入学後まもなく配られた「生活の記録」です。

1週間分の予定を24時間で細かく計画し、一日の結果をそのノートに書きます。たとえば、夕食後に英語の勉強を2時間すると予定を立てると。そのために20時までご飯を食べ終わることが目標になります。食べるスピードも早くなりました。いつもノートを近くに置いて、終わったらチェックをしていく。自分なりにご褒美を決め、「英語で20位以内に入ったらSMAPのCDを買う」と机の上に貼ってモチベーションを上げていました。それを繰り返すことで徐々に順位が上がっていきましたね。

その記録が、ホームルームで良い見本として紹介されるのも嬉しくて、教科ごとに色を分けるなど工夫していました。可視化するとどの教科が足りないのかが分かりやすいし、予定通り終えてチェックを入れる度に達成できた喜びを感じられます。その達成感の積み重ねを中・高生のうちに経験できたことが今でも私を支えていますね。

最近出張でいろんな場所へ行くことも多く、仕事に追われそうになるときもありますが、「生活の記録」と同じような時間割を作り、スケジュールを徹底管理しています。色分けした表を見てプライベートの予定が少ないと、友人と食事の約束を入れるなどバランスを取ることで充実した日々が過ごせています。

人生を切り開く力を身につけてほしい。

大学では政治学科に進み、政治家になる夢を追い続けていました。「行政研究会」というサークルに入って選挙の手伝いをしていたのですが、そこで現実とぶつかったんです。「政治家の世界では30代や40代でもまだ若手で、本当に自分のやりたいことに取り組めるようになるまでに、何十年もかかってしまう」。そう感じたのです。自分の性格からして、はやる気持ちをそれまで抑えられるだろうか、と悩みました。そして「目標を見失わなければチャンスは巡ってくる」と考え直し、政治ではなく、ビジネスの世界で起業をして、身近な自分のまわりから変えていこう、と決心しました。

そこで、起業やビジネスを学ぶためにコンサルティング会社に入社を決めました。入社試験では88人中78位と、ここでも落ちこぼれからスタートです。そのころも、学生時代の習慣を頼りに、「今月の営業目標を達成するために、今日は5件獲得するぞ」と、細かい目標を設定し、ひとつずつクリアしました。その積み重ねで新人トップまで上り詰めることができたのです。

それ以来コンサルティングの仕事をずっと続けています。私の信念は、女性に「自分でも気づいていない力」に気づかせることです。裏方の仕事をしていても本当はすごく能力がある人が、陰に隠れて殻にこもっている。偉そうに聞こえるかもしれませんが、隠れた自分の能力に気づいて、もっと輝いてほしいのです。

お母さんや奥さんが楽しく充実した仕事をしていれば、笑顔で家族と接することができます。女性が一層輝く社会をつくることで、子どもたちの笑顔を増やせることは、小さい頃に政治家になって実現したかったことにも近づいています。今後は海外でも女性の働きやすい環境づくりや管理職育成をするのが目標ですね。

自分の目標を達成するために、ただひたすら一歩ずつ進みながら道を作ってきたように思います。自律・自啓という校訓の意味を今、噛み締めています。東明館に通うみなさんには、この恵まれた環境で、自分で自分の人生を切り開く力を身につけてほしいと願っています。